



北京五輪の日本代表に決まったメンバー。2列目の右端が理絵さん。(写真：中国新聞社提供)

特集

「庄原から世界へ」

金藤理絵さんが北京五輪へ挑む

庄原市から36年ぶり 4 人目の五輪選手が現れた。
山内町出身の金藤理絵さん、19歳。
8月13日から開催される北京五輪の200m平泳ぎに出場する。
庄原の家族たちに見守られ、初めての五輪に挑む19歳の素顔に迫る。

り、先輩田村選手を抑えて2位に入った。タイムも2分26秒28で、派遣標準記録(2分26秒58)を突破し、北京行きを決めた。

一見、先行逃げ切りの作戦勝ちのように思えるが、本人は「体が勝手にいってしまった」と話す。それだけ、「勝ちたい!」という思いが強かった。その気持ちの強さが、先輩田村選手より勝ったのかもしれない。

「周囲が喜ぶ中で、意外にも理絵さんに笑顔はなかった」と、中国新聞社の荒木肇カメランは話す。北京を決めたことよりも、自己ベストを出せなかったことの方が悔しかった。高いレベルを求める理絵さんの姿勢が伺える。

レース後、東海大水泳部の加藤健志監督は父・宏明さんに「おめでとうございませう。これで、北京のロンドン五輪で金メダルが見えました」と声をかけ、握手をかわした。現時点でメダル争いに加わるのは難しいかもしれないが、北京の経験が必ずロンドン

4月20日、北京五輪代表選考を兼ねた日本選手権女子200m平泳ぎ決勝。北京へ行くためには、派遣標準記録を切って、2位以内に入ることが条件。しかし、理絵さんには2人の厚い壁があった。

一人は、昨年9月の日本学生選手権で、2分23秒85をマークし、日本記録を7年ぶりに更新した種田恵選手(JSS長岡)。もう一人は、理絵さんがあこがれる同大学の先輩、田村葉々香選手(東海大4年)。昨年4月の日本選手権で2分24秒55をマークし優勝。しかも、昨年の世界競泳では、銅メダルを獲得している。

応援に駆け付けた父・宏明さんは「理絵の自己ベス

ぜったいに勝ちたかった。
最後は気力をふりしぼった。
五輪代表を決めた日本選手権を
リポートする。

01 積極性でつかんだ五輪

トは2分25秒63。力のある2人が冷静にレースをしたらず、まず勝てない。自己ベストが出て、翌日ゆっくりと家族で食事ができればいい」と思っていた。

レース前、周囲の誰もが2強対決を予想。そこに、3番手の理絵さんが、どう食い込むかに注目が集まる。

「ぜったいに勝ちたい」。その一心でスタートから飛ばす理絵さん。50m、そして100mを、トップでターン。100mのタイムは、自己ベストに迫る驚異的なハイペース。「150mで止まりたかった」と本人が振り返るほど、全力で飛ばした。後半はさすがに失速したものの最後は気力で粘

北京五輪マダ知識

8月8日に開会式を迎える北京五輪。理絵さんが出場する競泳女子200m平泳ぎの日程は、8月13日に予選、14日に準決勝、15日に決勝が行われる。

女子平泳ぎは昔から日本のお家芸といわれ、過去の大大会にはバルセロナ五輪200m平泳ぎで金メダルを獲得した岩崎恭子さんなどがいる。



日本選手権で五輪代表を決めた時の表情
(写真：中国新聞社提供)

のメダル争いにつながると期待する。

「五輪でメダル」という、さらなる夢への挑戦が始まった。

気持ちの切り替えがうまい子

保育所のころは、帰りに花を摘み始めると家に帰らなくなる子でした。夢中になりやすい性格なのでしょう。(笑)

五輪代表になれたのは、山内小で学童水泳大会や陸上競技大会、スキー合宿に参加させてもらったり、家で農作業を手伝ったり、生まれ育った庄原市の環境が良かったのだと思います。

三次スイミングクラブの良き指導者に恵まれたのも幸運でした。「勝てばいい」という目先の結果を追わず、人間教育を大事にして、長い目で育成してもらいました。下手に筋力トレーニングを行わず、伸びしろを残したまま、大学に進学したことが北京五輪につながったと感じています。

自分で目標を口にして、自分を追い込むタイプですが、気持ちの切り替えがうまい子



日本選手権(写真:中国新聞社提供)

でした。練習に疲れて帰ってきて、大好きなバレーボールを見たり、お菓子を作ったりして、気持ちをリフレッシュしていました。また、小学校から高校まで続けたピアノも、よい気分転換になったと思います。つらい時も、友人からのメールで元気を取り戻すなど、周りの多くの人に支えられて、現在の理絵があると思っています。

北京五輪では、結果を問いません。とにかく全力で挑戦してほしいと願っています。

最初から速い子ではない、努力でつかんだ五輪

理絵さんを初めて見た印象は、マッチ棒のような細い子。甘えん坊で、少しわがままのところもあり、姉の藤田和恵コーチによく怒られていました。(笑) いわゆる普通の子です。

水泳は身長の高さを生かした大きな泳ぎで、後半になってもペースが落ちないのが特徴でした。才能といえば、すばやくストリームライン(推進力が得やすく、水の抵抗を受けにくい姿勢)を作れること。うまくいけば将来、大きく化けるかもしれないと姉と話していました。

しかし、最初から速かったわけではなく、中学校に入ってから本気で勝ちたいと思い始めてから。言われたメニューをこなすだけでは駄目だと自覚してきました。遊びたいときもあったと思いますが、自分



高校時代の理絵さんと井清コーチ

でここまでやらないと遊ばないと決めて、けじめがつくれる子でした。

五輪の代表をつかんだのは、精神的な強さが備わったからだと思います。北京五輪では、決勝まで残り、いい経験をしてきてほしいと思います。



父
金藤宏明さん

かねとう・ひろあき
昭和30年5月15日生まれ、庄原市山内町在住。三次高校体育教諭。専門は陸上競技だが、学生時代にスイミングクラブで3年間、水泳を指導。



三次スイミングクラブ
井清俊文コーチ

いせい・としふみ
昭和47年3月2日生まれ、三次市十日市町在住。みよし水泳友の会代表。平成12年から三次スイミングクラブコーチに就任し、姉の藤田和恵コーチと理絵さんを指導。庄原格致高校では、ラグビー部で活躍した。

理絵さんは昭和63年9月8日、山内町に生まれた。3人きょうだいの末っ子で、三次スイミングクラブに入部したお兄さんとお姉さんに付いて、小一からプールに通った。「当時は水泳がしたいというより、上の子がすることをしたかった」と父・宏明さんは振り返る。

しかし、意外にも水泳一本の生活ではなかった。山内小時代はバレーボールクラブとの二足のわらじ。そして、陸上やスキーと、さまざまなスポーツに挑戦する活発な女の子だった。「子どもにスポーツをしてほしい」と願う父・宏明さんは、冬場にスキー場へ連れていく一方で、温水プールを求め、西城町や東城町、遠くは羽須美村や広島市へ連れて行った。

このころに、さまざまなスポーツを経験したことが、後にアスリートとして成功する基礎になっている。

小学生のころは、お姉さんを目標に何となく水泳をしていた理絵さん。本

02 夢をカタチに

「いつか五輪に出場したい」
子どものころの夢が現実になった。
五輪代表までの道のりを振り返る。



かねとう・りえ
昭和63年9月8日、庄原市山内町生まれ。山内小・庄原中・三次高・東海大。小3から高3まで、三次スイミングクラブに所属。

(写真:中国新聞社提供)

格的に水泳をがんばると決めたのは庄原中に入ってから。放課後、4時前のバスで、毎日三次市のプールに通った。学校行事で、バスに乗り遅れたときは、祖父・嘉宏さんに送ってもらった。

にはすごい選手がたくさんいる。わたしも田村さんのように勝ちたい」とアスリートとしての意識が芽生えた。「やると決めたら、とこそこんやる性格。自ら厳しい練習を課していった」と

中一で初めて県代表に選ばれた。中国大会の決勝で惨敗。さらに、父・宏明さんに誘われて見に行った全国中学校水泳競技大会で、当時の田村菜々香選手の泳ぎに衝撃を受けた。「全国

一流の人間になれ」と言い続け、精神面を鍛えた。中学時代は、目標だった表彰台にあと一歩及ばなかったが、全国大会で4位にまで登りつめた。このころから、「いつかオリンピックに行けるといいね」と、井清コーチは声をかけ始めた。高校に入ってから、朝早く学校に行き、陸上トレーニングを始めた。思うように勝てない時期もあり、水泳を辞めたいと思ったこともあったが、家族や友人の支えを借りて這い上がってきた。

高二の全国高校総体で準優勝。高三では大会新記録で念願の日本一に輝いた。「オリンピックに行けるかも」。子どものころから憧れてきた五輪出場が、身近な目標へと変わっていった。

五輪という目標を達成するため、理絵さんが選んだのは東海大学への進学。同大学には、ずっとあこがれていた田村菜々香選手や水泳の専門誌にトレーニング方法を連載していた加藤

健志監督がいた。大学の食堂では、朝夕にアスリート用の食事が用意され、筋力トレーニングを増やした。高校から大学へと環境は大きく変わったものの、昨年4月の日本選手権で3位入賞。また、大学生の世界大会となるユニバーシアードでは、銀メダルと着実に記録を伸ばしてきた。朝6時から練習を始め、昼間は授業を受けて、夜9時まで練習する毎日。日本のトップ選手であっても、一般学生と同じように授業や試験をこなし、水泳だけに専念できる環境にない。甘えの許されない厳しい環境が、精神的な強さを育んだ。「練習は厳しいけど、一緒に水泳部に入った選手が、選手をあとからマナージャーとなり、わたしたちを支えてくれている。しかも、わたしたちよりハードなスケジュールで。周りで支えてくれた人たちに恩返ししたい」

感謝の気持ちを胸に挑んだ日本選手権で北京五輪を決めた。

03 思い出の五輪



西城町でパレードする竹内さん



東城町の久代東振興
会館に展示される
横平さんのブレザー

伝えていきたい。郷土の五輪。
庄原市出身の五輪経験者3人に、五輪の思い出を寄稿してもらいました。

オープンカーで ふるさとをパレード

まきひら・ゆうそう
昭和19年1月15日、庄原市板橋町生まれ。昭和38年から大阪府警。昭和43年メキシコ大会で14位、昭和47年ミュンヘン大会で33位。(約60人中)昭和44年全日本選手権優勝のほか、世界選手権に数多く出場。平成19年、庄原市宮内町に1ターンの。現在、上野総合公園に勤務。



メキシコ・ミュンヘン大会
近代五種競技出場
横平勇壮さん

わたしは近代五種競技で、2度の五輪に出場させていただきました。
近代五種競技とは、一人で射撃・フェンシング・水泳・馬術・ランニングと、異なる5つの競技をこなし、順位を決める複合競技のことです。
小さいころは、虚弱体質でありスポーツはしていません。都会にあこがれ、大阪府警に就職しましたが、赴任先の機動隊でついたあだ名は「モヤシ」で

した。何か得意なことを生かさないかと考え、陸上部に入ったことが競技を始めるきっかけとなりました。
「おもしろそう」と自分から飛び込んだものの、甘い考えだったので苦労の連続でした。成績が上がらないまま3年が過ぎ、昭和43年のメキシコ五輪の選考会で駄目なら、競技を辞めようと思いましたが、試合前、先輩が「お前は近代五種競技の天才だ。しかし、ばかだ。ばかはばかなりに、勝つことのみに集中しろ」と言われ、開き直った結果、優勝して五輪代表に選ばれました。人生最良の喜びでした。

五輪では、大会本部の記録ミスで銅メダルを逃し、悔しい思いもしました。しかし、五輪前にふるさとへ帰り、オープンカーで庄原や西城、東城をパレードして回ったことが、よい思い出になっています。



ミュンヘン大会の馬術競技

米国の層の厚さを 感じた大会

ともなが・よしはる
昭和25年2月18日、庄原市宮内町生まれ。昭和47年ミュンヘン大会で2次予選進出。主な成績：200m 20秒7、400m 46秒6、第5回アジア大会優勝。現在、日本実業団陸上競技連合の理事長。茨城県ひたちなか市在住。



ミュンヘン大会
陸上男子400m出場
友永義治さん

ミュンヘン五輪からすでに36年が経ちます。中学時代に始めた陸上競技ですが、東京五輪の名スプリンター、ボブ・ヘイズの力強く弾丸のごとき走りに、少年ながらにとっても感動したので覚えています。今でも一番速いのではないかと。とも。
そしてミュンヘン五輪開催一週間前の当地で行われた記録会での出来事が鮮明に蘇ります。400mレースのひと組が、五輪出場権を賭けた米国の最終選

考レースにセットされており、そんなこととは知らずに私はその組のレーンに立っていました。3人の選手は最初から凄まじい勢いで素っ飛ばしていき、結果的にマシューズ選手が優勝、メキシコ五輪金メダリストのエバンス選手は3位だったため本大会にはリレーでしか出場できませんでした。五輪本大会では、マシューズ選手が金メダリストとなり米国の層の厚さをみせつけた一場面でもありました。

私は五輪本大会では残念ながら二次予選までしかいけませんでしたが、非常にいい思い、感動をさせてもらい感謝しています。また選手村でのゲリラの銃による殺傷事件は、この期間中の悲しい残念な出来事でもありました。



陸上400mに出場した友永さん

良き指導者との 出会いに感謝

たけうち・あきら
昭和22年3月2日、庄原市西城町生まれ。昭和47年ミュンヘン大会、一次予選8分40秒4で5位(3位までが通過)。自己ベスト 8分31秒8。現在、日立造船(株)に勤務。尾道市在住。



ミュンヘン大会
陸上男子3000m障害出場
竹内 章さん

36年前を振り返ると、五輪出場が決まり、西城町の皆さんからパレードなどで盛大なる声援を受けながら、ご期待に背く結果で申し訳なく思っています。素質の無い者でも、良き指導者に出会い、陸上競技に導いていただいた中学・高校時代が一番の思い出です。
足はそう速くありませんでしたが、走るの大好きで、それも長距離ほど好きでした。美古登小から西城中に進学し、2年・3年と進級してもトラックレ

スでは郡予選で負け、県大会には出場できませんでした。高校は地元校に進むつもりでしたが、中川茂校長(故人)に「これからどんどん走ってみるか。やる気があるか」と言われ、進路を考えさせられました。中川校長の「とびこんでみる!」の一言から、進進高校の厳しい寮生活を選びました。

練習のきつかったこと。初めて家を離れ、練習ではビリのほうを泣きべそかいて走り、寮に帰るとホームシックも手伝って、布団の中で泣きました。渡辺修先生(故人)の指導のもと、張り詰めた生活で、がむしゃらな一年生でしたが、その年、駅伝のメンバーに加わり、区間賞を獲得した時のうれしさは忘れられません。

中川校長の「とびこんでみる!」の一言、渡辺先生の厳しい指導を受ける出会いがなければ、五輪出場などありえませんでした。本当に感謝しています。



ブレザー姿の竹内さん



体調に
気をつけて、
がんばれ！

友人
土井萌加さん

市内の小学校が参加する学童水泳大会では、全員のレースが終了後、「山内小学校の金藤理絵さんです」とみんなの前で紹介され、お手本として泳いでいました。友だちながらに、「すごいなー」と思い、山内小学校の誇りでした。

普段は、元気が良くて、明るい女の子。幼なじみが五輪選手になるなんて、うれしくて友だち同士で連絡し合い、理絵さんの話題で盛り上がりました。

北京五輪では体調に気をつけて、がんばってほしいと思います。

どい・もえか

学生。庄原市本郷町出身。理絵さんと同級生で、山内保育所からの付き合い。

自分自身が
納得のいくレースを

ピアノ講師
市川奈美さん



ピアノのレッスンでは、家で練習して来ても、自分が納得のいく練習をしてなければ、「練習してきませんでした」と答える真面目な子どもでした。

一つの曲を仕上げるのに時間はかかりますが、一つ一つのことを順番にこなしていく、その取り組みはすばらしいと感心していました。

優勝したときに「おめでとう！」と声をかけても、自分自身が納得のいくタイムを出していなければ「まだまだ駄目です」と答え、逆に3位でも自分が納得できれば優勝以上に喜んでいました。自分に厳しく、常に自分自身と戦っているのだと感じました。

北京五輪でも、彼女らしい自分自身が納得のいくレースしてくれるのではないかと期待しています。

いちかわ・なみ

ピアノ講師。庄原市山内町在住。理絵さんを小学校から高校までピアノを指導。



庄原市体育協会
門田三雄会長

「五輪代表に決まったよ」と、日本選手権の会場で応援していた元広島県立大学の吉川和利教授（電気通信大学）から携帯に連絡があり、二人で大喜びしました。

理絵さんといえば、小学生のころ、市民水泳大会に3種目もエントリーして、元氣よく泳いでいる姿がとても印象に残っています。また、陸上競技大会や市民キャンプにも参加してくれて、チャレンジ精神が旺盛な子だと感じていました。

子どもは皆、立派な素材をたくさん持っていますが、チャンスを与えてやらないと大きく成長しません。いろんなことに挑戦する機会を与えられた家庭環境がすばらしかったと思います。

平成18年に「庄原さくらスポーツクラブ」を設立しました。スポーツ少年団や学校の

五輪出場を庄原市のスポーツ振興に生かしたい

今回、理絵さんが五輪代表に決まり、「庄原市でも、やればできる」というやる気と勇気を市民に与えてくれました。また、五輪代表を祝い、体育協会をはじめ自治振興区や企業などでも横断幕を掲げられ、子どもたちにすごい影響を与えています。これを庄原市のスポーツ振興につなげていきたいと思っています。

理絵さんには、プレッシャーを感じず、自信を持って平常心でレースに臨んでほしいと願っています。

もんだ・みつお

平成9年から庄原体育協会の会長。平成18年からさくらスポーツクラブ理事長。庄原市川手町在住。昭和31年から中学校の体育教諭として、多くの子どもたちを指導。退職後も、庄原市のスポーツ振興に取り組む。



五輪代表を祝い、自治振興区や企業などが市内各地で横断幕



気持ちを強く持って
決勝進出を

山内少女バレーボール
元監督
河面伸直さん

理絵さんは小学生のころから、大変ながんばり屋でした。

17時30分からの練習で、理絵さんの動きが鈍く、「どうした？」と聞くと、「さっき5000メートル泳いできました」と答え、大変驚いたことを覚えています。普通、3000メートルから5000メートル泳いで、バレーボールの練習に来られません。こんな小学生は、今でもいないでしょう。

北京五輪では、気持ちを強く持って、できれば決勝に残れるぐらいがんばってほしいと思います。無事に終わって、笑顔で帰ってくることを祈っています。

こうも・のぶなお

山内郵便局長。庄原市殿垣内町在住。理絵さんが小学校4年生から6年生まで、バレーボールを指導。

思う存分
伸び伸びと泳いで

滝口季彦市長



庄原市から久しぶりに五輪選手が誕生したことを、本当にうれしく思います。

理絵さんはわたしと同じ山内地区で生まれ育ったこともあり、近所の子どもを見守る気持ちで、ずっと応援してきました。

また、小さいころから何度もお会いしていますが、将来は大成されるだろうと何か雰囲気を感じていました。これまでコツコツと努力を積み重ねてこられたこと、そして理絵さんを立派に育てられた家族の皆さんに、心から敬意を表します。

五輪は誰もが経験できない夢の舞台です。「参加することに意義がある」とも言われますが、実力を兼ね備えた理絵さんには上位入賞を目指してほしいと思います。自分を信じて、思う存分悔いのないようがんばってください。

04

ふるさと応援団

がんばれ！理絵さん
36年ぶりの思いを込めて
ふるさと庄原市から熱いエールを送ろう。

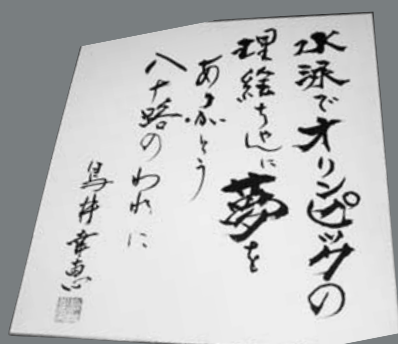
取材を終えて

平成19年の「広報しょうばら 1月号」で、「庄原から北京五輪を目指す」と高校3年生の金藤理絵さんを紹介しました。当時は、庄原から五輪を目指してがんばっている子を知ってほしいという思いでしたが、一方で、本人への変なプレッシャーにならない方がいいかと心配もしました。本当に夢が現実となって、改めて理絵さんの強さを感じました。

理絵さんの実家を訪れた時に、「夢をありがとう」と書かれた色紙が送られていたり、理絵さんの同級生で、目標を見失い学校を休んでいた子が、「テレビで理絵ちゃんを見て、もう一度がんばろうと学校に通い始めた」と連絡があったりしたことを聞きました。理絵さんの五輪出場が、多くの人に夢や希望、元気を与えていることを実感しました。

県水泳連盟の壮行式で、子どもたちが理絵さんのサインを求め長蛇の列になりました。その会場で、父・宏明さんが「庄原からでも世界を狙えることを知ってほしい。どの子にもチャンスがある」と力強く語る姿が印象的でした。

理絵さんの活躍で、子どもたちの夢が広がり、地域に新しい力が生まれる予感がしました。



05 金藤理絵選手に聞く

念願だった五輪出場。
どのように挑むのか、
理絵さんに抱負を聞いた。

レース前は不安でしたが、今までしてきたことを無駄にしないように泳ごう、わたしは一人じゃない、みんながそばにいて応援してくれているなどと自分に言い聞かせ、笑顔を心がけていました。代表に決まった時は、タイムが悪かったの、うれしさよりも悔しさの方が大きかったです。最初は、田村先輩の方が実力が上なのに、本当にわたしが代表でいいのかと思いましたが、今は五輪選手という自覚と責任を持ってがんばろう、やるしかないという前向きに考えられるようになりました。

五輪代表に決まりました

困難を乗り越える力は

きつくて、つらくて、逃げ出したいなど、弱い自分に負けそうなの時もありますが、わたしを支えてくださる人がたくさんいるからがんばれます。つらくてもがんばっている仲間や、声を枯らしてタイムを取る仲間を見れば、わたしもまだがんばれると思います。

五輪に向けた調整は

上半身を強化し、パワーを一発で出せるよう、五輪本番を想定した練習に取り組んでいます。7月20日から韓国の済州島で直

北京五輪への抱負を

緊張せずに自分らしい大きな泳ぎで、積極的なレースを心がけます。必ず決勝に残り、ロンドン五輪につながる泳ぎをしたいと思っています。

市民の皆さんには、いつも応援をしていただき、ありがとうございます。「がんばれ」の一言がわたしの力になります。たくさんの方への感謝の気持ちを忘れずがんばってきます。これからも応援よろしくをお願いします。

前合宿をして、そのまま北京に移動して大会に臨みます。

Interview



「レースで勝つためには、まず自分に勝つこと」



理絵さんにサインを求める子どもたち



県水泳連盟の壮行式でマスコミに囲まれる理絵さん